

「江戸時代の古墳観を伝える石碑」

さんしんれいのほか
三神靈之墓

▲三神靈之墓

古墳は、3世紀後半から7世紀にかけて盛んに造られ、市内では現在のところ約500基が確認されています。

古墳の中にはさまざまな副葬品が納められています。それを目当てに古くから盗掘の対象となってきたことも事実です。また、開墾などによって削られてしまった古墳も少なくありません。このような古墳は、記録に残されることが少なく、我々がその詳細を知ることがは難しくなっています。

一方、古墳を削った際に人骨が出土し、祟りを恐れ、供養するために建てられた石碑が各所に見受けられます。そこには、古墳を掘った経緯や埋葬施設の様子、出土遺物などが記されており、失われてしまった古墳の内容を知る上で貴重な資料と言えます。

このような石碑の一つが田部の西雲寺に残されています。三神靈之墓と刻まれた碑で、高さは約120cmです。碑文の内容を要約すると、次のようになります。

「田部村に石棺の一部が露出している古墳があり、文政5年（1822）、村人が古墳を暴いた。石棺は17枚の板石からなり、夫婦と一児の遺骸と弓剣刀槍があつたが腐食して使い物にならなかつたため、失望して溝に捨ててしまった。その後、村では人や牛が死ぬなど悪いことが重なつた。村人は恐怖におののき、人骨を桶に盛って埋葬を請うてきた。住職は村人達の愚行を責めながらも、戒名（證空院殿儀山宗忠大居士、證光院殿貞月妙操大姉、徹山了暎大童子）をつけて冥福を祈つた。」

この戒名は、当時では大名や旗本クラスのもので、いかに丁重に供養されたかがわかります。私たちも、祖霊に対しては敬虔な気持ちになります。江戸時代の人々もその気持ちは強く、「祟り」は広く信じられていたようです。

この石碑は、当時の人が古墳や祖霊に対してどのような思いを持っていたのかを知る資料であるとも言えます。